

美術専攻 立体芸術研究領域

ミヤジマ アヤ

宮島 彩



昨日の会話 / 個人的な対話 / points

鉄、ネジ、ナット、ガラス／

鉄、ネジ、ナット、布、紙、ナスカン、二重丸カン／

インスタレーション、鉄、布

昨日の会話 / 個人的な対話 / points

「これが一体何であるのか」わからないものや、自分の内から訳もわからず湧いてくるもの、不要なものとして片付けられてしまう些細な思いつきや引っかかりをどうしたら肯定できるだろうか。そこに何かが存在していることはわかるが、目の前に霧がかかっているかのようにはっきりと確認することができないもの。本作品の目的は、日常の中にある未知なるものを許容し、その存在を想像することを諦めないこと、そして、誰もが持っている繊細な感覚を誘発する場をつくることである。本作品の主たるモチーフであるテーブルは、日常の中にあるわかりにくいものや見えにくいものを意識するための枠組み、ガイド、物差しのようなものとして機能する。テーブルでは、ノートやペンを置き、文字を書き、食器を置き、食事をし、水をこぼし、シミを作り、他者と会話をする。テーブルは、物と物、物と人、人と人とが互いに影響しあい、様々な過程を経て何か日々少しずつ育まれていく場である。相互関係の間でわかりにくいものや見えにくいものを認識しやすくする基盤となるのである。テーブルは対話を可能にする基盤であるとも言える。対話は他者と関係を紡いでいく親密な行為であり、私たちは時間をかけることで現前していない部分を感じ取れるようになる。対話の中では、「思っていたのと違った」「思っていたより近かった/遠かった」といった既存の思い込みからのズレや、自分の経てきた経験からは理解することが難しい「わからなさ」が生じることがある。そのズレやわからなさは居心地の良いものとは限らないが、その居心地の悪さもより一層親密な対話のためのひとつの要素となる。テーブルの下を覗く時、日常生活の中でいつもと少し違う空気をふと感じ取ることがあるように、私たちが見逃してしまう何かを少しでも感知できることを期待する。